0-4-5

ISSN 0288－1594

# AV JOURNAL

1998年３月 第 28 号

目　　次

ヒンディー語劇のインド公演旅行記……溝上　富夫……２
スペイン語専攻のＬＬ……松本　健二……５
平成９年度テープ・ライブラリー利用統計……８
新規購入レーザーディスク一覧……９
テープ・ライブラリー利用案内……10
平成10年度ＬＬ教室等時間割表……11

大 阪 外 国 語 大 学

# ヒンディー語劇のインド公演旅行記

地域文化学科・アジアアフリカ講座
（ヒンディー語コース）　溝　上　富　夫

外大の学生による語劇の海外公演自体は、全くの初めてのことではなく、前例もある。本学の旧中国語学科の学生が上海で、日本の演劇を中国語に翻案したものを上演した実績がある。又、東京外大でも、語劇ではないが、フィリピンの歌と踊りをフィリピンで披露したと聞く。

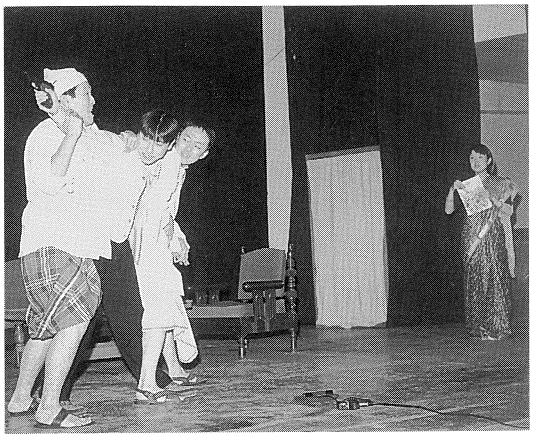
しかし、今回、本学のヒンディー語専攻有志学生がインドで行ったヒンディー語劇の公演旅行（平成9年12月21日～平成10年1月6日）は、インド政府の正式の招へいによるものであること、あの広い国土を4都市にわたって（移動距離は3千キロメートル！）6回も公演旅行をしたという点で、画期的であり、全国の外国語大学でも初めての試みであったに違いない。その点でニュースヴァリューがあり、朝日、読売、神戸の各新聞に大きくとり上げられたわけだ。さらにいえば、13人の学生に加えるに、筆者と外国人教師の2人の教官と、保健管理センター所長の太田先生、図書館の仲川事務長の4人の大学関係者が同行するという大掛かりな団体旅行でもあった。

又、インド側からみても、外国人がインドへ来て、インドの言葉で劇を上演するというのも（モーリシャスのようなインド系移民の国を除いて）、全く初めてのことだった。従って、インドのマスメディアのフィーバーぶりは、当然のことながら、日本の比ではなかった。この公演旅行のサクセス・ストーリーをレポートする前に、上演した二つの劇の内容と、出演者を紹介しておこう。

一つは、ラージェンドラ・クマール・シャルマー作の「幕が開く前に」という一幕もの喜劇である。ストーリーは、「演劇狂のアニルは妻シーラーのご機嫌を損ねてばかりいる。芝居の上演が明後日に迫った日、リハーサルに来なかったヒロインのヴィーナが降板したものと誤解したアニルは、その代役を妻にやらせようとする。シーラーは不承不承引き受けたものの、劇のセリフと実生活を混同してうまくいかない。さらに、次から次へと訪れる客にリハーサルを妨害され、ついに芝居は幕が開く前に終わってしまう」というもの。キャストは次の通り（地は地域文化学科、国は国際文化学科を示す）

| | |
|---|---|
| アニル（劇作家） | 水田　健吾（地2年） |
| シーラー（その妻） | 丹山未由紀（地3年） |
| | 竹林　有里（国4年） |
| ダニーラーム（隣人） | 林　　重行（地2年） |
| マカンラール（隣人） | 掛谷　祐一（地1年） |
| アニルの娘 | 畑中　美穂（地1年） |
| ピンディダース | 山上謙二郎（地1年） |
| スブラマニアム（隣人） | 松本　大介（国3年） |
| ヴィーナー（劇のヒロイン） | 河村　美穂（地3年） |

シーラー役が二人いるのは、ヴァラーナシー公演のみ、現地でホームステイしてヒンディーを勉強中の竹林さんが主役を演じたという意味。これは、昨年の間谷祭で初演し、11月下旬に神戸のインドクラブでお披露目公演を行ったものである。もう一つは、マラーシャンカル・ニシェーシュ作の「愛とは？」で、あらすじは「近所でも理想の夫婦として評判の、夫ヘーマントと妻パーリーは結婚14周年日を迎えようとしている。シュクラー夫妻の夫婦げんかを仲裁したり、破談になりかけた青年の縁談をまとめたり相変わらず、近所の信頼を集めている。ところが、ふとしたことで、パーリーの昔の恋人からもらった



恋文を見つけたヘーマントは裏切り行為だと彼女を激しく責める。しかし、世間体をつくろうため、14周年記念のパーティーはそのまま行い、その後で家を出て行けという。偶然、大学時代の同窓生アヴィナーシュの訪問を受けたヘーマントは、アヴィナーシュが、カレッジ時代にプレイガールとして評判の悪かったカピラーの過去を許し、彼女を真剣に愛して、彼女との幸せな結婚生活を送っているのを聞いて、衝撃を受ける。そして、夫婦の愛情とは、過去を問わないものであり、現在が大切であることを悟ったヘーマントは、出て行こうとするパーリーを呼び止め、抱き合う」というもので、２幕７場からなる。これは、一昨年12月、神戸のインドクラブで初演し、昨年12月19日の渡印直前に、学内でお披露目をしたが、宣伝不足や授業期間でもあったため、観客は少なかった（実をいうと、間谷祭においてもその観客の少なさが我々を神戸へと駆り立てたのであったが）。

出演者は―

| | | |
|---|---|---|
| ヘーマント（夫） | 新美　貴士 | （国４年） |
| パーリー（妻） | 嶋田　古京 | （地４年） |
| | 尾崎　理恵 | （国３年） |
| シュクラー氏（隣人） | 豊岡　　敬 | （国３年） |
| シュクラー夫人 | 粕谷　季代 | （地３年） |
| アヴィナーシュ（旧友） | 松本　大介 | （国３年） |
| ウメーシュ（青年） | 岡内　敏郎 | （地２年） |
| ナレーシュ（カメラマン） | 林　　重行 | （地２年） |
| サプレー（司会役） | 水田　健吾 | （地２年） |

パーリー役に二人いるのは、「幕が開く前に」の場合と同様に、ヴァーラーナシー公演のみ、現地留学中の尾崎さんが演じたのである。松本、林、水田の３君は、双方のドラマに掛け持ち出演であった。

さて、このような大掛かりな海外公演を企画したのは、上述のように、一昨年から続けている神戸のインドクラブでの公演を観たあるインド人の発案が契機であった。やや大言壮語癖のあるインド人の言うこと故、当初は「そんな大それたこと」と信じなかった。しかし、だんだんとそのインド人の態度が真面目で、ムンバイへの出張ごとに、実際に関係者と接触して具体化しようと動いていてくれることを知り、こちらも真剣に受け止め始めた。それが、昨年の４月頃の話であり、まだ漠然としたインド行きの話を聞いた学生もピンとはこなかったのではあるまいか。まず、スポンサーをつけること。インドの外貨事情からして、往復の航空運賃負担は望めないので、せめてインド国内の滞在費と旅費を負担してくれるような。しかし、やはりインドは官僚国家であることを知ることになるのだが、このようなイベントをするにも、単に権威づけというだけでなく、実際的な理由からも、政府の関与を仰がねばならなかった。そうするようにとの民間の演劇人からのアドバイスに従ったのである。大阪のインド総領事館を通じて、我が国の文化庁や国際交流基金に当たるIndian Council for Cultural Relationsという役所に手紙を出した時点で、インド公演の話は、公的性格を持つようになったのである。

そのI.C.C.R.の求めに応じて、神戸公演時の録画テープを送ったが、I.C.C.R.はその評価を国立演劇学校の専門家に委ねた。政府が正式に招くとなると、質を問題にするのは当然だ。native speakerのしかも演劇の専門家が評価を下すとなると、多分駄目だろうと半ばあきらめかけていた。１ケ月以上も返事がない状況で、いよいよその感触を深めていたときに、思いがけずＯＫが出、さらにデリーでの滞在費も負担するというウソみたいな返事を受け取った。質について一定の評価を得たことはうれしかった。

しかし、これから猛けい古を重ねて、目と耳の肥えたインドの観客の鑑賞に耐えられるまでレベルアップをはからねばならない、しかも、残された時間はわずか２～３ケ月しかない。少なくとも、毎週２回の練習は欠かせないが、クラブ活動やアルバイトその他個人的な理由で、全員がそろうのが又大変。いやでも緊張感とストレスは高まる。この間、航空券やビザの手配その他現地の主催者との打ち合わせ

等で、ほとんど連日ファックス通信の雑用に追われる毎日となった。しかし、もっと大変だったことは、滞在費用の工面である。これは、大学教師にとって最も苦手とすることだ。デリーだけの滞在費は負担してもらえても、その他の都市では不確定だったので、いろいろな費用を考えると、ざっと百万円近くは必要だった（結果的には、アーグラー、ムンバイでも負担してもらったので、大幅に残余金が出たが）。これを卒業生と在阪神間のインド人の寄付に頼ることにした。また、神戸公演では入場料をとって、費用の一部に当てることにした。卒業生には手紙を書いただけだが、インド商業会議所には会長を訪れ、直接趣旨を説明して、寄付を要請した。その結果、多くの人々の好意により、目標額を集めることができた。研究者としては、論文を書いているほうが楽だが、初めてのこの企画を断じて成功させなければならないとの決意から、このような繁雑な事務的作業もいとわずにやった。しばらくは「研究者」の身分を脇にやって、「教師」に徹することにしたのだ。語学教師としては大いにやり甲斐のあるビッグ・アドベンチャーであり、大きなチャレンジでもあったことはいうまでもない。

訪問の時期は、冬休みの利用しか考えられない。なにせ大きな国であるから、首都だけの公演では物足りない。インドへ初めて行く人がほとんどだったので、観光もしたい。というわけで、もう一つの大都市ムンバイ（旧名はボンベイ）と、ヒンドゥー教の聖地ヴァーラーナシー、それにタージマハルで有名な古都アーグラーを加えた４都市で公演することとした。そして、２つの大都市では２日に分けて（地理的にも北地区と南地区に分けての）２回公演、他の２都市では１回公演とすることに決めた。各都市では、公演の後、休養や観光のための日程もとったが、結果的にはかなりの強行軍のようだった。どの都市のどの会場でも、熱烈歓迎を受けた一方で、我々を悩ませたのは、予期しなかった北インドの20数年ぶりという寒波のため、病人が続出したことや、交通機関の不規則性のため、ヴァーラーナシー～アーグラー間600キロメートルを18時間もかけて夜行バスで移動するという何苦行を経験したことだった。さらには、主催者側が（とくに個人の場合）劇の始まる前と途中、ときには幕が降りてからも延々とセ

レモニーをやったため、すっかり雰囲気がだらけてしまったことも苦い経験だった。なんといっても、学生は素人であるから、このようなシラケや長旅による疲労は、てきめんに演技に影響した。ベストの体調、ベストの気分で臨まないといい演技ができないことを痛感した。ＶＩＰを賓客として招いてセレモニーをするのは、インドでは当たり前だが、功罪ともにある。「罪」の方が強く出たのがヴァーラーナシー公演であり、「功」はムンバイで出た。ムンバイの公演は２回とも、プリヤダルシャニーという民間の文化団体が主催してくれたのだが、その議長が州政府に顔が利くということで、文化担当大臣が出席して開会式を催した。上演後には、一行のため、大臣主催のレセプションまで開いてくれた。前評判が高かったため、他のどの都市よりも、マスコミが多く詰め駆けた。２日目には、ムンバイの山岸総領事も出席した。観客は最高の800人を数えた。舞台装置もどこよりも立派で、さすがは、映画産業と演劇の中心地であると思った。実は、１日目の公演の舞台写真がTIMES ON INDIAという一流新聞の一面トップに大きく載ったことが、インド人よりも在留邦人に衝撃的だったようだ。それもそのはずだ。たとえ、天皇のご訪問があっても、一流の歌舞伎役者が訪れても、あの欄にあれほど大きく扱われることはなかろう。現に、中曽根内閣のときに催された「日本週間」で一流の芸能人がインドを訪れたが、これほど大きくは報道されなかった。日本関係の報道記事としては、全く破格の報道だった。いかにインドのマスメディアが我々のヒンディー語劇に関心をもったかが分かる。さらに、全国ネットのＴＶで数度に渡って放映されたため、われわれはたちまち、インド中で有名になった。その後に訪れた日本人はインドから必ず、我々のヒンディー語劇上演のこと

を告げられたという。もちろん、称賛の意をこめて。

どの会場でも、万雷の拍手を浴びて感激したが、細かく観察すると、劇の各場面の観客の反応は、会場ごとに微妙に異なっていた。当然、爆笑を期待していたのに、意外と笑いが起こらなかったり…、逆に、何でもないセリフが受けたり…で、本当の理由はよく分からない。観客の数、層、上に述べたようにささいなことが学生の演技に影響したので、そういうことも、関係したのかもしれない。観客数でいえば、ムンバイの800名が最高だったが、会場が爆笑の渦に包まれたという点では、350人のデリーの方がすごい反応だった。これは想像するに、ムンバイの観客は上流階級の人が多く、反応の仕方がストレートではなく、「上品」だったためか、あるいは４都市の中では唯一ヒンディー語地域ではなく、グジャラーティーやマラーティーやシンディーの人々が多かったためではないか。もちろん、ムンバイはヒンディー映画の中心地だから、この人達がヒンディーを理解しないということは全くありえないことだが、ボディーで反応するとなると、やはりnative speakerに比べて、零点何秒かは多くかかるのではないか、などと想像するのも楽しいことだ。

公演以外で有益だったのは、デリーの国立演劇学校訪問である。そこの俳優のリハーサル風景を見学したが、さすがに、プロの迫力ある演技に圧倒された。子供の演技もすごかった。発声からして違う。マイクなんかいらないのだ。素人の我々も、発声法は練習する必要性を痛感した。広い会場では、マイクを使っても、後部では、セリフがききとれなかったという。また、デリーでは、大統領と副大統領の二人に、それぞれの官邸で会見することができ、親しく言葉まで交わしてもらった。これには、同行された太田先生と仲川事務長も感激された様子。とくに、この３月で退官される仲川事務長は、外大生活の最後のよい思い出となったと喜びを表明された。筆者にとっても忘れ難い思い出となったのは、いうまでもない。

今回の公演旅行の成功は、大阪外大の知名度を高めるのにも貢献した。そして、我が大阪外大のレゾン・デートルを再認識させてくれた。要するに、外大は語学と縁をきってはならない。ごく当たり前の事ながら、語学こそが社会で評価されるのである。ヒンディーを学んでいたおかげで、新入生でもＶＩＰ待遇を受けたのである。インド人にも喜んでもらい、学生にも喜んでもらい（細かいことでは、いろいろあったが）、教師冥利に尽きる。わたしは、今、凱旋将軍のような心境にある。学生もほんとうによく頑張ってくれた。感謝したい。そして、これを契機に他の専攻語学生にも、どんどん現地へ出掛けて語劇を演じてもらいたい。間谷祭は寂しすぎる。本国でも通じる水準の語劇を目指すべきである。

我々の「海外公演」はひとまず終わったが、まだ３月末に「東京公演」が残っている。この「打ち上げ公演」によって、神戸から始めた我々の１万５千キロにも及んだ公演旅行を終えることになる。「東京公演」も大阪外大にとって初めてのことである。もちろん、姉妹校の東京外大には案内を差し上げている。

終わりになりましたが、縁の下の力持ちとして、学生を支援してくださった太田先生（病人が多くでたので、先生がおられなかったら、どんなに不安だったことか）と仲川さんにも、心から感謝の意を表します。

# スペイン語専攻のＬＬ

地域文化学科・アメリカ講座
（スペイン語コース）　松　本　健　二

のっけから私事で恐縮だが、筆者は87年度に本学スペイン語科に入学し、それが結果として学問の世界に入るきっかけとなった。その当時は１年生の語学実習が６コマあった。文法２、講読２、会話１、そして「会話ＬＬ」（以下ＬＬと略記）である。

当時のＬＬは故ホセ・ルイス・アルバレス先生の担当であった。高校時代、筆者の中の「外国人」は「アメリカ人」だったので、生粋のスペイン人とで

も言うべきアルバレス先生の存在自体がカルチャーショックであった。内戦の話に思わず涙を流されたり、87年に死去したセゴビア（スペインのギタリスト）を追悼するとおっしゃっていきなり朗々と歌い始めたりされた姿を、今でも思い出すことができる。後にＬＬを自分が担当することになり、偶然にも、当時アルバレス先生が使っておられた教科書『モダン・スパニッシュ』を採用することになったため、自分自身が学生時代に使っていたその本をめくってみたが、練習問題をやった形跡は無いは、まっさらなページが半分以上あるは、落書きばかり描いてあるは、サボリの見本を示すその痕跡に、改めて情けなくなった。しかし同時に、ページの端々に詩人や画家の名前、さらには詩の一節などが走り書きしてあるのを見て非常に懐かしかった。みな全てアルバレス先生が授業中に教えてくださったものだ。ロルカの詩などは、スペイン語の響きを直観してもらうために、今でも時々ＬＬの授業で学生に聞かせるが、これも『モダン・スパニッシュ』余白の走り書きに含まれている。

元サボリ学生がＬＬを担当するようになってこの春で５年目になる。現在スペイン語専攻のＬＬは夜間主も含めて３コマ設定されている。昼間主の１年生（Ａ・Ｂ組）２コマ、夜間主１年が１コマ、全て必修である。現在のところ、千葉教官が昼間主Ｂ組を、筆者が昼間主Ａと夜間主を担当している。アルバレス先生も含めた先輩の先生方が営々と築き上げてきた枠組みの上に、現行方式の細かな仕上げが施されたのが、91年度の千葉・長谷川両教官が担当の時代あたりらしい。今日それが具体的にどのような目的と方法論を持っているのか、問題点はないのかなど、思いついたことをこの機会に記しておく。

スペイン語ＬＬは会話と違い日本人教師が担当する。従って、正しい言葉づかいによるコミュニケーション能力習得を目指す会話の授業とは一線を画さざるを得ない。しかし、日本語が禁止されている会話の授業では、様々な発音上の矯正を外国人教師の発音の模倣に頼らざるを得ないのと違って、ＬＬの授業では、そうした矯正が日本語を用いた説明という方法でなされる。１回90分が24～５回という短い時間内では、発音上の矯正のためのより合理的な方法が後者であることは言うまでもない。それに他の外国語に比すとスペイン語は日本語と広い意味で音声的に類似点が多く、１年間しっかり指導すれば、ほとんどの学生が発音上の課題を克服できる。曖昧な表現だが、スペイン語専攻では会話が「正しい言葉づかい」によるコミュニケーション能力習得を目指し、ＬＬは「正しい発音による」コミュニケーション能力習得を目指すという、２授業の役割分担を想定している。（もちろん、ここで言う発音という言葉の概念は、音節単位の発音以外にもアクセントやイントネーションも含めた、発話における物理的な面でのあらゆる習得必須事項を視野に入れている。）２年次になるとＬＬは無くなるが、これは上述の理由による。

次にＬＬの最大の特徴である視聴覚機材の主な使用方法をあげておく。

①教科書パタン・プラクティス（以下ＰＰと略記）の全体練習において、INTERCOMモードなどを使用し、個々の学生の発音矯正をしてゆく。

②教科書の会話モデルやＰＰを録音させる。（例えば昼間主の場合、大体１年で60分テープ20本前後になる）

③ＰＰ自習。

④ＰＰ練習録音。

⑤ディクテーション。

⑥ビデオ機器の使用。

スペイン語ＬＬでは、毎週暗唱試験を課しているため、実質上①には時間が割けない現状がある。②は３倍速の録音システムにより、暗唱の合間などを利用して行なう。③は練習者の自主性に任せ、録音提出は強いない。やはり暗唱の合間を利用して行なう。④は97年度は夜間主で行なった。60分のテープを計８本、接続法過去形まで１年生文法レベル計40課分のＰＰ録音テープに、練習モードで各自の声を吹き込み、大体１本分録音できる度に提出する。もっとも進んだ学生は、高度な複文構造の問題を含む32～３課までこなしている。この方法は夜間主ＬＬにおいて伝統的に採用されてきた。提出されたテープを採点するのは相当な手間だが、効果があるので今も続けている。また、自習時間を取りにくい夜間主の学生にとって、その都度評価がつくというプレッシャーがあるため真剣に取りくまざるを得ない、

この一見ハードなＰＰが、文法授業で学習した事項の経験的復習の場になっているという、いわば他授業の補足的効果を見逃すことはできない。⑤は、一旦録音したものを空き時間に聞いておき、全体の答え合わせで納得するという一連の過程を必ず経なければならない。学生にとって、ディクテーションという練習方法は、一発勝負に終わってしまうと全くと言っていいほど効果が無い。一旦録音して繰り返し聞いた上、不明な部分を整理してチェックし、あるいは提出のうえ採点をしてもらい、初めて効果の上がる練習なのだ。主にテープ教材を用いた穴埋め方式で行なっているが、ＣＤを用いて歌詞の聞き取りをさせるのも非常に効果的である。ディクテーションは漫然と行なわないで３段階の手順を踏むよう指導するのが望ましい。（１：音の聞き取り＞２：単語の確認＞３：統語上の正否判定と意味確認）最後に⑥についてだが、現在スペイン語専攻のＬＬでは、ビデオの積極的使用はなされておらず、未だその有効な活用法が見出せないでいる。ハイテクの時代にやや古くさい考え方かもしれないが、ある程度緊張状態にあるべき初学者にとって、呑気なビデオ鑑賞は有害なだけという気もする。どちらかと言えば、３～４年を対象とした専門領域の資料体としてのビデオ活用こそ必要であろうし、実際、ＡＶ機器の需要は前期語学実習担当の教官に限ったことではあるまい。一般教室におけるＡＶ機器の需要は誰しもが認めるところである。

さて、上にあげたような機材の使用イコール授業内容なのかといえば、それは若干違う。なぜならば、スペイン語ＬＬの伝統「暗唱試験」が存在するからだ。これはほぼ毎週、あらかじめ暗記してきた教科書の会話モデルを１人づつ発表するという形式で行なわれる。97年度は昼間主のみで行なった。発音の矯正がその最大の目的であるが、発話時に役立つ様々な基本的文型を覚えさせるのも重要な目的の一つである。この暗唱は１人づつ行なうため、当然待ち時間や終わった後の空き時間ができるわけだが、この時間帯の活用法に関して２通りの意見がある。まず第１に、試験中は全員を教壇前に注目させ、他人の暗唱も聞かせるという方法である。これによって発表時の集中度は増し、試験結果も確実に向上するであろう。また、評価を個別に行なうのではなく、最後に総評という形で行なうのであれば、時間の短縮にもなる。学生も、他人の暗唱における教師の矯正を、総評の時間に自分のものとして学習する機会を得られる。しかしながら、一方では、せっかくのＬＬ機器を使用しないまま、暗唱中の約40～50分の間放っておくのももったいない。そこで第２の方法として、各自のブースでテープを使用しＰＰをさせる策がある（上述の③あるいは④にあたる。ちなみに97年度の夜間主のＬＬは、ＰＰ④だけでも学生にとっては相当な負担となっている様子だったので、暗唱試験を行なわなかった。）

今後も質の高い暗唱試験と徹底的なＰＰの両立は難しいだろうが、やはりこの２つをバランスよく採用するより他に道はない。まず昼間主。やはり暗唱は続ける。空き時間は、暗唱の時間が長引きそうな場合に限り、録音提出を義務としたＰＰをさせてもよいが、原則的には他の学生の暗唱を聞かせ、教師による総評を理解の助けとさせる。夜間主も暗唱試験がやはり必要である。しかし、夜間主学生にとっては義務的なＰＰ（④）も欠かせない。暗唱の頻度を２週に１度くらいに減らせば、ＰＰとの両立も十分可能になるだろう。そして、昼夜ともに、暗唱・ＰＰに約２／３くらいの時間を割くが、余った時間帯はディクテーションを積極的に行なう。

最後に長文の暗唱試験をあげておこう。４月に学生にテキストを渡し、母国話話者による同テキストの朗読テープも録音させる。内容は講読教科書１～２課分ほどの長文である。年に数回読みの練習や個人的指導を行ない、最終的に後期の試験期間中に発表させる。後期課程の授業において、あまりにもスペイン語の「読み」がひどい学生がいると外来の先生方に指摘された時に、一番責任を感じるのが１年次のＬＬ担当者である。普段の暗唱試験が会話のモデルを使用しているだけに、最低でも年に１度の長文暗唱試験は絶対に必要である。

今後の新機器導入に伴い、大きく授業内容が変わることもありうる。今の機器さえ十分使いこなしていないかもしれない。現行体制には担当２名の好みもかなり反映されているから、教官の意向次第で今後のさらなる授業方針改善もあるだろう。もっとも、暗唱という、この意外に地道な方法が中心となっている限り、そう大きな変更は無さそうな気もするが。

〈ＬＬ便り１〉

# 平成９年度（４月～12月）テープ・ライブラリー利用統計

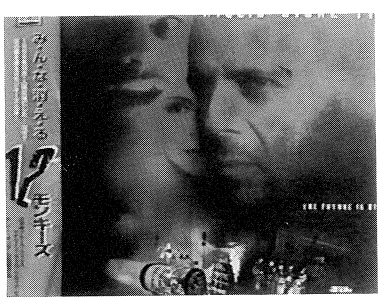
１．月別利用者数

| | ビデオ・ＬＤ | カセット | ＣＤ | パソコン |
|---|---|---|---|---|
| ４月 | 896 | 95 | 49 | |
| ５月 | 2,017 | 245 | 77 | 43 |
| ６月 | 1,832 | 275 | 112 | 165 |
| ７月 | 1,159 | 131 | 56 | 103 |
| ８月 | 106 | 18 | 6 | |
| ９月 | 1,243 | 197 | 86 | 130 |
| １０月 | 2,315 | 252 | 133 | 370 |
| １１月 | 1,784 | 261 | 100 | 460 |
| １２月 | 822 | 195 | 89 | 465 |
| 計 | 12,174 | 1,669 | 708 | 1,736 |

＊パソコンは５階マルチメディア語学自習室の利用者数です。

２．よく利用されたビデオ・ＬＤ

| | 資料名／監督 | 利用回数 | 資料番号 |
|---|---|---|---|
| 1 | 12モンキーズ（'95）／テリー・ギリアム | 235 | Ｅ－0754 |
| 2 | ミッション・インポッシブル（'96）／ブライアン・デ・パルマ | 196 | Ｅ－0770 |
| 3 | マイ・ルーム（'96）／ジェリー・ザックス | 182 | Ｅ－0793 |
| 4 | アポロ13（'95）／ロン・ハワード | 181 | Ｅ－0751 |
| 4 | ショーガール（'95）／ポール・バーホーベン | 181 | Ｅ－0752 |
| 6 | 太陽と月に背いて（'95）／アニエスカ・ホランド | 171 | Ｅ－0776 |
| 7 | アンカー・ウーマン（'96）／ジョン・アブネット | 169 | Ｅ－0772 |
| 8 | 身代金（'96）／ロン・ハワード | 141 | Ｅ－0796 |
| 9 | ジャック（'96）／フランシス・フォード・コッポラ | 132 | Ｅ－0798 |
| 10 | ウォーターワールド（'95）／ケビン・レイノルズ | 122 | Ｅ－0753 |
| 10 | インデペンデンス・デイ（'96）／ローランド・エメリッヒ | 122 | Ｅ－0790 |



〈ＬＬ便り２〉

# 新規購入映像資料（レーザーディスク）一覧

その13　　（1998年２月現在）

| 資料名 | 音声 | 資料番号 |
|---|---|---|
| Apollo 13（アポロ13） | （英語） | E-0751 |
| Showgirls（ショーガール） | 〃 | E-0752 |
| Waterworld（ウォーターワールド） | 〃 | E-0753 |
| 12 monkeys（12モンキーズ） | 〃 | E-0754 |
| Gypsy（ジプシー） | 〃 | E-0755 |
| Naked Lunch（裸のランチ） | 〃 | E-0761 |
| The River Wild（激流） | 〃 | E-0762 |
| Heavenly Creatures（乙女の祈り） | 〃 | E-0763 |
| Forrest Gump（フォレスト・ガンプ） | 〃 | E-0764 |
| The Scarlet Letter（スカーレット・レター） | 〃 | E-0765 |
| Mr.Holland's Opus（陽のあたる教室） | 〃 | E-0766 |
| Four Rooms（フォー・ルームス） | 〃 | E-0767 |
| Babe（ベイブ） | 〃 | E-0768 |
| Twister（ツイスター） | 〃 | E-0769 |
| Misson Impossible（ミッション・インポッシブル） | 〃 | E-0770 |
| Fargo（ファーゴ） | 〃 | E-0771 |
| Anchor Woman（アンカーウーマン） | 〃 | E-0772 |
| The Rock（ザ・ロック） | 〃 | E-0773 |
| The Truth About Cats & Dogs（好きと言えなくて） | 〃 | E-0774 |
| Total Eclipse（太陽と月に背いて） | 〃 | E-0776 |
| Braveheart（ブレイブハート） | 〃 | E-0777 |
| Tin Cup（ティン・カップ） | 〃 | E-0778 |
| Independence Day（インデペンデンス・デイ） | 〃 | E-0790 |
| Phenomenon（フェノミナン） | 〃 | E-0791 |
| Fly away home（グース） | 〃 | E-0792 |
| Marvin's room（マイ・ルーム） | 〃 | E-0793 |
| Mars Attacks（マーズ・アタック） | 〃 | E-0794 |
| That thing you do（すべてをあなたに） | 〃 | E-0795 |
| Ransom（身代金） | 〃 | E-0796 |
| Sense Sensibility（いつか晴れた日に） | 〃 | E-0797 |
| Jack（ジャック） | 〃 | E-0798 |
| Sleepers（スリーパーズ） | 〃 | E-0802 |
| Shine（シャイン） | 〃 | E-0803 |
| The crucible（クルーシブル） | 〃 | E-0804 |
| Trainspotting（トレインスポッティング） | 〃 | E-0805 |
| Le grand bleu（グラン・ブルー） | （フランス語） | F-0291 |

| 資　料　名 | 音　声 | 資料番号 |
|---|---|---|
| Haut Bas Frangile（パリでかくれんぼ） | （フランス語） | F-0292 |
| Nelly et Mr.arnaud（とまどい） | 〃 | F-0298 |
| Il Postino（イル・ポスティーノ） | （イタリア語） | It-0111 |
| Marcellino pane e vino（マルセリーノ　パーネ　ヴィーノ） | 〃 | It-0115 |
| Shall we ダンス？ | （日　本　語） | J-0238 |
| Cyclo（シクロ） | （ベトナム語） | V-0116 |

## 〈ＬＬ便り３〉

# テープ・ライブラリー利用案内

テープ・ライブラリーでは、各国語のビデオ・オーディオ教材の貸出、衛星放送視聴サービスを行っています。また、５階マルチメディア語学自習室では、インターネット、パソコン自習ができます。

資料、パソコンの利用希望者は、４階テープ・ライブラリーで所定の手続きを行って下さい。

① 開館時間

テープ・ライブラリー

月～金　９：30～19：45

土　10：00～16：00

マルチメディア語学自習室

月～金　９：30～19：45

（月、水の午後は授業のため利用できません。火・木は暫定です。）

② 利用方法

◎ビデオ・ＬＤ、ＣＤ、カセット、衛星放送を利用したい場合

４階テープ・ライブラリー・カウンターで所定の手続き

↓

ライブラリー・カードとＡＶ資料請求書（希望資料の番号、タイトル等を書く）を提出する。

↓

資料、ブースの鍵を受け取り指定されたブースに入り利用して下さい。

（２人以上で利用する場合は、資料、ブースの鍵は受け取る必要がありませんので指定された３階のブースに入り利用して下さい）

↓

利用終了後は資料、ブースの鍵を返却して下さい。ライブラリー・カードを返却します。

**◎パソコン、インターネットを利用したい場合**

４階テープ・ライブラリー・カウンターで所定の手続き

↓

ライブラリー・カードを提出し、利用申込書を受け取り、指定された５階のブースに入り利用して下さい。

↓

利用終了後はパソコンの電源を切り、利用申込書に必要事項を記入し、テープ・ライブラリー・カウンターに出して下さい。ライブラリー・カードを返却します。

# 平成10年度　ＬＬ教室等時間割表

| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 月 | ４－Ⅰ | E/船山(前) | C/陳 | C/張 | C/上神 | DM/パルダン | F/小沢 | E/スターク |
| | ４－Ⅱ | B/南田 | B/キンエー | DM/パルダン | H/溝上 | | | |
| | ５－Ⅰ | | E副/ドランス | E副/ドランス | E/ドランス | E/ドランス | C/上神 | |
| | ５－Ⅱ | | PB/林田 | | F/ポカール | F/ポカール | | |
| | ３VR | | PH/津田 | PH/ニカノール | UR/松村 | AF/赤坂 | | |
| | AVホール | | | | | UR/松村 | | |
| | ５MA | | | S/出口 | 院/出口 | | | |
| | デシジョン | E/船山(後) | | | | | | |
| 火 | ４－Ⅰ | | E/スミス | E/スミス | PB/林田 | PB/ローザ | | |
| | ４－Ⅱ | C/待場(前) | H/シュルヴァースタヴァ | H/シュルヴァースタヴァ | TR/キタウラ | HG/マールトニ | | |
| | ５－Ⅰ | | PB/林田 | M/塩谷 | IT/郡 | C/張 | | |
| | ５－Ⅱ | IT/郡 | IT/郡 | IT/マンチョリーニ | IN/松野 | | | |
| | ３VR | | AF/吉田 | HG/マールトニ | HG/マールトニ | IT/中江 | | |
| | AVホール | | | | | 教育心理/三雲 | | |
| | デシジョン | C/待場(後) | C/待場 | | | | | |
| 水 | ４－Ⅰ | C/古川 | SW/トゥーレ | C/上神 | C副/陳 | E副/ドランス | D/友田 | C/青野 |
| | ４－Ⅱ | D/大澤 | V/冨田 | S/千葉 | E/スターク | HG/早稲田 | | R/神山 |
| | ５－Ⅰ | SW/斉藤 | IT/郡 | E/箱崎 | E/箱崎 | R/神山 | | |
| | ５－Ⅱ | R/カザーケヴィチ | R/カザーケヴィチ | K/朴 | IN/アイプ | IT/郡 | | |
| | ３VR | PB/ローザ | PH/大上 | | C/張 | D/ベルント | D/ベルント | |
| | AVホール | | 芸術論/上倉 | DM/田邊 | | 総合/扇 | | |
| | ５MA | | | IT/郡 | S/出口 | | | |
| 木 | ４－Ⅰ | D/大澤 | V/冨田 | | UR/タバッスム | P/ラジャブザーテ | | |
| | ４－Ⅱ | R/神山 | R/神山 | | TR/トプラマオール | SH/栗本 | | |
| | ５－Ⅰ | | PH/大上 | | | J/北川 | | |
| | ５－Ⅱ | | B/南田 | | | DM/福居 | | |
| | ３VR | PH/津田 | | | DM/パルダン | DM/パルダン | | |
| | AVホール | PH/ジョイ | 女性学/武田 | | | | | |
| 金 | ４－Ⅰ | HG/早稲田 | S/松本 | IT/井本 | C/宿 | M/今岡 | D/甲田 | S/松本 |
| | ４－Ⅱ | T/宮本 | PH/大上 | D/塩路 | D/塩路 | K/朴 | | E/大津 |
| | ５－Ⅰ | SW/トゥーレ | E/舟阪 | IT/マンチョリーニ | E/スミス | E副/新屋敷 | | F/安生 |
| | ５－Ⅱ | | F/トレジェ | F/トレジェ | PB/ロドリゲス | | | E/杉本 |
| | ３VR | | | | | | | E/スミス |
| | AVホール | | | | R/冨浪 | | | |

AV Journal ー第28号ー

1998年3月27日発行

編集　大阪外国語大学視聴覚教育委員会
　　附属図書館視聴覚資料係
発行　大阪外国語大学
印刷　株式会社　一心社